

アミューズメント・スクエアは演劇・音楽・ビデオ・本・食など、さまざまなテーマを新しい切り口で紹介し、新鮮な情報を提供するとともに、地域に根ざした諸活動の活字拠点として誕生しました。ご意見・ご感想、取り上げてほしいテーマ等ありましたら、アミューズ編集部宛てお送りください。

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

演劇空間「スペースベン」

岩淵正利ひとり芝居

何も芝居に限った話ではないが、「これを最後に俺はもうやめるんだ」という言葉は、わりと良く聞く言葉で、私自身も毎日の様に思っていたりする。まあ、言葉自体はどうという事もないのだが、その陰には様々なドラマがあるものだ。二月二十三日にも、そんな小さなドラマが生まれようとしている。

岩淵正利、二十二才。イージーシアター我楽多屋に旗あげ公演から参加。以来、公演の度に成長株として周囲から期待の声があがる様になる(イージーシアター我楽多屋95秋の陣「楽」の中の一本で、かわうそを演った男と言った方が通りがいいかもしれない)。その彼も、今年で卒業し、地元に戻っていく。

「地元帰ってからは芝居やらないの?」「やらないと思います。というか、やれないと思います。我楽多屋のメンバーの様な人達とも会えるかどうかかわからないし」

私の期待をよそに、彼の舞台はこれが最後となる。一見さわやかだが、頑固で恐しく貧欲な彼が、これまで吸収してきたものに「今の彼」をのっけて舞台上立つからにはきつと面白いもの

ができるに違いない。

「怖いのがやりたい(本人談)

「本日は多忙なり」

家で本読み 学校で勉強?夜は芝居でフル回転。

そんな毎日が過ぎていく。けれどこんな毎日が自分の生活リズムになって、もう何年も経つ。こんなリズムが何年も続いているとあたりまえになってしまふ。芝居をやっていない時期というのは、自分が自分じゃない、自分の一部がかけている、そんな気がしている。でも《それが一般的な生活リズムに戻っているということなんだ》とは思っていても、自分じゃないのは嫌だから、だから芝居を続けてる。《なぜこんなに大変なことをやっているのだろう?》と思うことはあるが、やっぱり続けている。理由は単純なのかもしれない。ただ、目立ちたいだけ。ただ、刺激が欲しいだけ。ただ、何かを求めたいだけ。ただ……

ただ、それだけのために続けてきた。ただ、それだけのために。でも、それが重要なんだと思う。それがすべての出発点なんだから。「学生」

という身分が終わる今、自分の中で一つの区切りとして、芝居をしてきたことの区切りとして、この作品をお送りします。

そもそも、こんなことを考えたのは一九九五年十一月のイージーシアター我楽多屋、95秋の陣「楽」の公演の最中だった。

この公演の中で自分自身の持っていたコンセプトは「笑」だった。そのため《次は違うコンセプトのもとに芝居を作りたい、自分の区切りとしての》と思ったとき、目の前に一九九六年二月二十九日があった事、そして、決定的にしたのが、自分の持っているイメージを壊したい。自分の違う面を出したいという似た考えを持った平間幸夫という役者がいたことだった。

こうして動き出したこの企画、できれば、四年に一度、二月二十九日に続けていこうと思っています。ともかく、この企画の第一弾「介在せしもの」をご覧ください。なお、二回公演のため一回目と二回目で、何か違った趣向を凝らしますので、二度ご覧になるほうがより楽しめます。皆様のご来場をお待ちしています。

※「介在せしもの」作者 市川考樹

スペースベン
今月の予定

二月九日金
八戸高校演劇部公演
「白花」
十九時三十分開演 料金五百円

未熟ですが、パワーと真剣な心をぶつけます。どうぞ観に来て下さい。い。

二月二十三日金
岩淵正利ひとり芝居

タイトル未定 作 長尾広海
十九時三十分開演 料金五百円

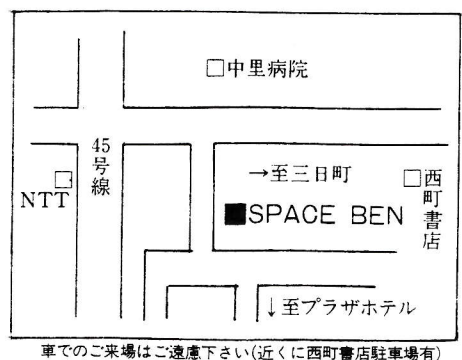
これまでやってきた、どの舞台上よりも、役者をやったよかったです。思えるものにしてほしいと思っています。

二月二十九日(木)・三月一日(金)
四年に一度のうるう年企画
「介在せしもの」 作 市川考樹
出演 市川考樹 平間幸夫

今しか出来ない事がある。だから、今、やるしかない。

《問い合わせ》

TEL 031 八戸市柏崎一ノ十一ノ八
TEL & FAX 0178(49) 九八七六



車での来場はご遠慮下さい(近くに西町書店駐車場有)